

「未来にむけての都市档案馆」参加記

横浜開港資料館 伊藤泉美

2004年4月23日から24日にかけて、上海市档案馆の外灘新館落成式典と記念国際シンポジウムが上海市において開催された。以下、その概要について紹介したい。

今回のシンポジウムは上海市档案局と上海市档案馆の主催で、4月23日に外灘新館落成式と見学会、同日午後から24日にわたり、シンポジウムがひらかれた。上海市档案馆は虹橋空港に近い仙霞路に本館が所在するが、この度、上海の顔ともいべき外灘の地に新館を開き、档案の閲覧公開にあたる利用部を移転した。

シンポジウムには中国国内からは江蘇省档案馆、人民大学档案学院、北京市档案馆、香港歴史档案馆、マカオ歴史档案馆など各地の档案関係者が参加した。海外からは韓国政府記録保存所、モスクワ市文書館、そして日本からは国立公文書館大濱徹也理事・大竹敬氏、沖縄県比嘉茂政副知事・新垣勝弘氏、沖縄県公文書館山田義人館長・久部良和子氏、大阪市公文書館庄谷邦幸館長、横浜開港資料館太田和彦館長と伊藤泉美が参加した。

今回のシンポジウムで注目される点は、中国側の報告者が档案馆の「公開性・公共性」をアピールした点である。とくに上海市档案馆馬長林氏は「服务理念と方法の根本的変遷」について述べ、従来中国の档案馆は政府機関や一部の研究者を対象としてきたが、今後は一般市民を対象とし、国家档案馆から公共档案馆へ向かうと強調した。その姿勢を体現したのが外灘の新館といえる。新館は11階建てで5階と6階に閲覧室がある。ここではデジタル化された档案はパソコンで閲覧し、原資料については、本館より取り寄せて閲覧する。目録はインターネットのホーム・ページに公開され、海外からも検索可能である。2階・3階は上海史の展示室で、館蔵の貴重な档案や古写真がふんだんに使われ、必見である。

閉会の辞の中で上海市档案馆劉南山館長は「档案馆が上海市民のデートの場所となるように」と述べた。開かれた档案馆への変化の有り様には、隔世の感がある。横浜開港資料館は1988年から上海市档案馆との交流を行っており、その間、上海市档案馆は日本の各地の文書館施設を見学し、多くのことを学んだ。彼らの意識変革に加えて、中国の経済成長とIT産業における技術躍進が、今日の上海市档案馆の変貌を可能にしたといえよう。これからは日本の文書館が上海市档案馆に学ぶ時代が到来した。